



ADRC Highlights

Vol.27

Asian Disaster Reduction Center Biweekly News

July 2, 2001

➤ ADRC 客員研究員レポート

フィロミナ・ミリア(PNG)



パプアニューギニア(PNG)は、南緯0~14度、東経141~160度の太平洋に位置します。PNG本土は、インドネシア東部のイリアンジャヤで同国と国境を接しています。また地質構造上、環太平洋火山帯として世界的に最も地理上地震活動が活発な地域のひとつに分類されています。

歴史的にPNGは多くの災害に見舞われ、人々や経済は大きな打撃を受けてきました。これは多くのプレート境界が接し、太平洋とインド洋が交差する地域であるという自然条件によるもので、地震、火山噴火、津波、干ばつ、サイクロン、洪水や地すべり、高地においては霜などの自然災害を受けやすいのです。さらに自然災害に加え、開発や人口移動によって原油の流出、公害、不法土地利用、環境破壊のような人災も起こっています。近代化社会へと移行する過程において、災害も多様化し、増加してきているのです。

PNGで歴史的に最も大きな被害を与えた災害は、1998年7月17日に起きたアイタベ津波でした。2,200人が亡くなり、300人が病院に収容され、11,000人が家を失いました。1998年の津波やラバウルのツイン火山の噴火、97年から98年に起こった干ばつから、住民は自らがこうした自然災害にさらされていることに対する準備が不十分であったことを学びました。資源の少ない若い開発途上国として、PNGは効果的な災害対策に積極的に取り組みつつあります。

自然災害を止めることは誰にもできませんが、国家としては少なくとも、災害を受けやすい住民に十分な知識を持ってもらい、危険についての認識を高め、災害発生時に備えて十分な予防対策を取ることができるようになればなりません。政府と国家災害対策局は、これまでの教訓を考慮し、災害の軽減を目的とする「21世紀教育と啓発プログラム」を全国、特に災害を受けやすい地域を中心に開始しました。

私は、PNGの災害管理に責任を持つ国家災害対策局の危機管理課で教育訓練事務官として勤務しています。アジア防災センターに来るに当たり、私は客員研究員プログラムを十分に理解していませんでしたが、オリエンテーションを通じて、このプログラムはトレーニングばかりでなく、23のメンバー国の研究者が経験や知識を共有し、ADRCや日本の災害に関する専門家や研究者と協力体制を築くことのできる環境を提供してくれるものだと分かりました。

また、経験や知識の共有ばかりでなく、このプログラムには火山噴火、地震、地すべりなどの災害に見舞われやすい地域や、日本政府やその他の災害対策関連の組織を訪問する機会もあります。プログラム修了時まで、多くの経験とともに災害対策分野での知識や技能を高めることもできると思います。様々なことを学び、アイデアを共有し、ADRCの活動に貢献できるよう頑張っていきます。

< Philomena Miria, Training Officer, National Disaster Management Office, Dept. of Provincial & Local Government Affairs, PNG >

➤ 国際会議への参加

□ WHO Consultation on Developing EHA Regional Information System

6月18日~21日までWHO(World Health Organization)のWPRO(Western Pacific Regional Office)が主催する"Consultation on Developing EHA(Emergency and Humanitarian Action) Regional Information System"に参加しました。ADRCは20日、インターネットを利用した最新災害情報・防災関連法・組織・計画の提供や、防災地理情報システムのVENTENについて説明を行い、現在WHOとADRCが共同して進めている「災害データの地図化」プロジェクトへ

の理解と協力を求めました。WPROでは、緊急管理のための地域情報システム(RISEM: Regional Information System For Emergency Management)の開発に取り組むことになっており、災害情報DBの部分ではデータの共有に伴う内容の充実が期待されます。

➤ ADRC OBからの手紙

□ 阪神・淡路大震災メモリアルセンター

この4月にアジア防災センターから兵庫県庁に戻り、はや3ヶ月が過ぎました。アジア防災センターでの約3年間、3回にわたるADRC国際会議、国連IDNDRのプログラムフォーラム(1999)、GDIN会議など、アジアを初めてとする多くの国々の方々と交流する機会に恵まれ、世界数十カ国にわたり多くの友人ができたことはかけがえのない財産となりました。また、3月のGDINキャンペラで私が提案したユニークIDプロジェクトが実現の運びになったことは、大きな喜びとするところです。

ここでは、私が兵庫県において現在担当している、阪神・淡路大震災メモリアルセンター(仮称:以下メモリアルセンター)について簡単にご紹介いたします。

兵庫県は、2002年春のオープンを目指してメモリアルセンターの開設準備を急ピッチで進めております。メモリアルセンターにおいては、阪神・淡路大震災にかかる資料等の収集・保存・展示や、国内外の関係研究機関等と連携し、広域支援を視野に入れた実戦的・総合的な調査研究を行うとともに、大規模災害発生時の広域支援機関として、実践的なノウハウや豊富な災害対応の経験を有する専門家を迅速に被災地に派遣し、被害状況の調査や被災地の災害対策本部等に専門的な助言等の支援を行うこととしております。詳しくは下記Webをご参照下さい。(<http://web.pref.hyogo.jp/hukkou/memoriaru/>)

初代センター長には、京都大学防災研究所の河田恵昭教授が就任予定で、東京大学の廣井脩教授を初めとする10名の上級研究員(非常勤)も内定しています。現在、おおむね5年間、調査研究、広域支援などを通じて総合的、実践的な防災の知識を有する専門家として育成される専任研究員の公募を行っているところです(7月19日締切り)。

また、2004年にオープン予定のメモリアルセンター2期には、アジア防災センター、国連人道問題調整事務所(OCHA)、国連地域開発センター、地震防災フロンティア研究センターなどが入居予定で、メモリアルセンターは国際的な防災関係機関が集積する防災情報等の発信拠点となります。今後とも、メモリアルセンターの開設準備、開設後の活動にご理解ご協力くださいますよう、よろしくおねがいいたします。

<前アジア防災センター主任研究員 現 兵庫県阪神・淡路大震災復興本部 阪神・淡路大震災メモリアルセンター整備室 村田昌彦 masahiko.murata@go.phoenix.pref.hyogo.jp >

➤ ADRCへの訪問者

□ JICA国際救急援助および防災体制セミナー研修生

去る6月14日、国際協力事業団(JICA)沖縄国際センター主催の防災セミナープログラムの一環として、アフリカ諸国の防災担当者が、アジア防災センターを訪れました。

当センターの防災情報システムやトレーニングプログラム、阪神淡路大震災からの復興などについて熱心な討議がなされました。

特に阪神淡路大震災の復興のプロセスや当センターの行う研修に高い関心が示され、被災経験国としての情報発信の重要性を再認識しました。(<http://www.adrc.or.jp/visitor.asp?id=22>)



ご意見・ご要望等があれば
右記までご連絡ください。

編集・発行: Asian Disaster Reduction Center(アジア防災センター)

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-1 IHDビル3F

E-mail: editor@adrc.or.jp TEL: 078(230)0346 FAX: 078(230)0347

誌代・送料: 無料 / 毎月2回発行(予定)